

## 影印版大蔵経の一二の問題——影印高麗版を中心として——

松 永 知 海

はじめに

近代における中国・韓国・日本の三国で編纂された大蔵経は、相互に影響して刊行されてきた。ここでは、日本の『大正新脩大蔵経』（以下、大正蔵経）の編纂にかかわる経緯を踏まえながら、影印版大蔵経の編纂の問題を明らかにしていきたいと思う。

大正蔵経は仏教研究にとって基本叢書として広く受容され、活用されてきた。その正蔵は『高麗版大蔵経』（以下、高麗蔵経と略称）を底本にして、宋版・元版・明版の四本に隋・唐・敦煌写本なども校合されている。S A TやC B E T Aなどのテキストファイルも大正蔵経を基本テキストとして入力され、公開されてきた。一方で、校勘を検証することの必要性は異口同音に指摘され、新たな大蔵経の編纂が叫ばれてきたのも事実である。

ここでは、大正蔵経の編纂の経緯を改めて概説するとともに、影印版大蔵経の問題点を明示し、さらに今後の大蔵経の検証の方向性を示していきたい。

【1】大正藏經編纂の経緯

大正藏經はパソコンやインターネットも無い時代に金属活字印刷で大正一三年（一九二二）より刊行が始まり、昭和九年（一九三四）までの僅か一一年間で完成した。正藏部は五五巻、続藏部は三〇巻、図像部は一二巻で、目錄部三巻を加えて全一〇〇巻であり、基本的にB5版三段組み、一段二九行一行一七字で各冊約一〇〇〇頁の大冊である。

その底本は、日本の東京増上寺の高麗藏經であり、対校本として同じく増上寺に所藏される宋・思溪版、元・杭州版・山内寺院（現在、東京西蓮社所藏）の明・萬曆版の三本や、敦煌写經や日本に伝わる聖語藏をはじめとした古写經、梵本・藏本・巴本なども参照している。

大正藏經の刊行の経緯については、当初より編纂に関わっていた小野玄妙の「刊行経過要略」に詳しい。以下、その記述によって抄出してみる。その冒頭には困難な状況を幾たびも乗り越えて完結させた興奮と気概と達成感などを読み取ることができる。

大正新修大藏經は正當に本日（本日）を以て全八十五巻三千五十三部一萬壹千九百七十巻の開版を終了した。前期後期を通じて毎巻平均約九百五十頁、總頁數八萬六百三十四頁、此の他に附帶出版として昭和法寶總目錄二卷（未完）、三十八部九十八巻、二千六十二を印行した、前と合して都計八十七巻、三千九十一部、一萬二千六十八巻、八萬二千六百九十二頁の大發刊である。去る大正十一年八月以來滿十箇年の長時日を費して奮闘努力漸くにして完結するに至つたもの、昭代に於ける最高の文化事業として、世界に於ける最大の出版事業として内外

識者の驚喜と賞讃のうち、豫期以上の好成績を収むることを得て、之に過ぎたる幸慶はない。今茲に本事業の終局に際し、創業當初より、十年一日の如く終始直接間接に本事業を翼賛し、多大の援護を賜りし會員並に内外の援護者諸氏に向つて深く感謝の微志を表するため、新編の總目録と會員並に内外援護者芳名録とを印行し、紀念として捧呈することにしたのであるが、此の機會に於て本編修刊行事業の今日までの経過に就き極めて簡単に御報告申し上げたいと思ふ。

周知のように、大正一二年（一九二三）九月一日に日本の関東地方を揺るがせた関東大震災が起こつた。震災とそれに起因する火災とで日本の中枢は大打撃を蒙つたが、その前年の大正十一年（一九二二）の初夏、東京帝大（現・東京大学）の梵文学教室で高楠順次郎（後にこの出版事業の都監となる）を囲み雑談の中、当時販売されていた縮刷蔵経が高額でありさらに入手も困難なことが話題となり、安価な大蔵経で古写経との対校の必要性も兼ね備えた大蔵経として大正蔵経は企画された、という。翌年一月には編修にとりかかり三月には目録を作り成案を得て、四月八日には芝増上寺閱蔵亭で底本となる高麗蔵経、校本の宋思溪版・元杭州版・明萬曆版の四本の校合が開始された。この日は仏誕生会であり、第一巻の阿含部から開始された。この時の校合者の一人に後に述べる山崎精華もいた。

さて、大正蔵経の特徴としては、当初四点が打ち出されていた。

- (1) 宋代一切経初版以前の写経、即ち隋唐の写経（天平、敦煌写経）を主として対校する。
- (2) 縮刷一切経総一九〇八部八四一五巻の外に日本、朝鮮、敦煌発見の釈論、続蔵中の研究に枢要なるもの、日本撰述のもの、碑銘類、記伝類等、凡そ七〇部六五九巻を新加する。
- (3) 各方面専門家の校正を主体とする。

(4) 四号活字四六倍版西洋綴とする。

というものであった。

五月末からは東京帝室博物館（現・東京国立博物館）の別室で正倉院聖語蔵の古写経をはじめ各地に秘蔵されていた古写経との競合が開始された。さきにも記したように、同年九月に大震災があったが、各校合所・印刷所などは罹災を免れ原稿等は無事であったが、発行元の新光社が全焼して高楠が全責任を負うことになり、高楠家の一室に仮事務所が設けられた。平成一八年内閣府の報告書によれば死者一〇五三八五人、全潰全焼流失家屋二九三三八七戸にも上り関係者の中に罹災者も多くいたと推定される。まだ始まったばかりの大事業に対して異論もあったことも推測できるが、翌年（一九二四）五月第一巻が配本された。「その間百難簇出で、編修に經營に極度の苦勞をした。……高楠先生の辛苦は實に想像をしても恐ろしい程のことであった。」と記している。昭和三年（一九二八）までは毎月一冊づつ発行したが、第五三回配本の事彙部下では一三〇〇〇の新字母を雕ることになり三か月を要したという。

昭和四年（一九二九）二月に第五五巻目録部を刊行し、大正蔵経の正蔵が完結し、その検索の便を図るために昭和法宝目録を同年八月までに二冊出版した。

翌月の九月から続蔵に着手、日本撰述の章疏、宗典、図像等を主に敦煌、朝鮮並びに新発見の古逸章疏を加え二八巻とする予定であったが、経済的理由から図像部を別巻とし、内容の充実のために三〇巻にする編修に変更した。それらの内、第八四巻悉曇部や真言宗事相部の整版は、字彙部と同様の難出版であったという。

そして最終的には全一〇〇巻の一大叢書として完成をみたのであった。小野玄妙は残された付帯事業として①図像部の叢刊、②目録の輯成、③索引の新纂につづけて④未発見典籍や未入手典籍、更には割愛せざるを得なかった

書名を挙げて、今後どうしても補遺せねばならないこととして補続刊行の事業を加えている<sup>(1)</sup>。図像部の発刊から③索引についてはその後刊行されているが、④補続事業については個々には補完出版があるものの、学界を挙げての補続事業はこれからの日本の課題といっても良いであろう。

以上、「刊行経過要略」から経緯を抄出した。その最後は関係者一覧の芳名を掲載する。一覧のはじめには都監高楠順次郎・渡邊海旭の二名、編輯部として小野玄妙・和泉得成の二名を挙げている。校合部四七名、編輯校正部五四名、散在校合三五名、加点点注五〇名、目録索引並図像部七名、経営部九名、装釘部には植木製本部、職工長、終装部、縹紙部、押箔部、整葉部、打綴部刷本部、折紙部、配本部、和本部制本所など総計一五九名を挙げている。つぎに外護者芳名（経本借用）として一三三の機関・寺院・個人の芳名、最後に内護者（資金借用並寄贈）として三九の機関・個人の芳名を挙げて関係者への感謝を記している。

これらは、各巻の奥付にその名をみる人々も含まれるが、ほとんどが印刷に関わる整版や製本や経営に関わるいわゆる裏方の人びとであり、震災や活字新雕という技術や経営困難などの艱難辛苦を乗り越えて協力し、完遂したそれらの方々に向けられた感謝を大蔵経目録の巻尾に記し、その辛苦を労っている。

上記のように、全一〇〇巻が編纂されたが、第一巻の刊行（一九二三）から正蔵の五五巻まで、金属活字印刷の整版で足かけ七年足らずで刊行した。このことは、前述した頻伽蔵経の原稿本の存在を抜きにしては考えられないであろう。

【2】その検証

方廣鋈は具体的事例を挙げながら、大正蔵經に対する総合的な評価をしている<sup>(2)</sup>。その「古典籍デジタル化という視野における『大正蔵』」では、大正蔵經の『四分律』・四十卷本『華嚴經』・『那先比丘經』を例に高麗蔵經と比較した植字の錯誤率を記している。中でも、『那先比丘經』下巻については、高麗蔵經の第一八張と第一九張との錯張と「不」という文字を挿入していることを記している。しかしながら、それは高麗蔵經と大正蔵經とを直接比較しているだけで、編纂の経緯を考慮に入れていない。そこで、方廣鋈の研究成果に導かれながら、『那先比丘經』下巻を例に、底本である東国大学校本影印『高麗大蔵經』と東洋仏典研究会本影印『高麗大蔵經』と、縮刷蔵經、頻伽蔵經と大正蔵經とを刊行順に比較対照してみた。すると二一カ所の相違点を指摘できた。一覧は次のようである<sup>(3)</sup>。

					東国大学文字
①	死持乃	死時乃	死時乃	死時乃	死時乃
②	不王言	不王言	不王言	不王言	不王言
③	如海水	知海水	知海水	知海水	知海水
④	立其行	亡其行	亡其行	亡其行	亡其行
⑤	其火焰寧可	其火焰寧可	是火焰寧可	其火焰寧得	其火焰寧可

②①	亦自念	亦自念	今自念	亦自念	亦自念
②②	上殿坐	上殿坐	上股坐	上股坐	上殿坐
②③	護其名	護其名	護其名	護其名	護其名
②④	那先王	那先王	那先王	那先王	那先王
②⑤	令鹹耳	令鹹耳	爾鹹耳	爾鹹耳	爾鹹耳
②⑥	制其身	制其身	不制其身	不制其身	不制其身
②⑦	罪之輕	罪之輕	罪之輕	罪之輕	罪之。
②⑧	兩人殃	兩人殃	所人殃	所人殃	兩人殃
②⑨	俱倒地	俱倒地	俱倒地	俱倒地	俱倒地
②⑩	飢乃田	飢乃田	飢乃由	飢乃由	飢乃由
②⑪	至百歲	至百歲	至百藏	至百藏	至百藏
②⑫	耶那先	耶那先	耶那先	耶那先	那那先
②⑬	搗捶閉	搗捶閉	搗捶閉	搗捶閉	搗捶閉
②⑭	耶那先	耶那先	耶那先	耶那先	那那先
②⑮	假令佛如	假令佛如	瑕令佛知	瑕令佛知	瑕令佛如
②⑯	自愛其	自愛其	自受其	自受其	自受其

①本来「時」であるが、東国大学校本は部首の「日」部分の第一画と第二画とが欠けて「扌」に見える状態。

- ② 本来「王」であるが、大正蔵経は「士」とするのは単純に校正ミス。
- ③ 本来「知」であるが、東国大学校本は「如」とする。馬場久幸氏に東国大学校本図書館所蔵原本を実見して頂いたが「知」となっていた。写真の段階での修正が加えられたものと考えられる。
- ④ 本来「亡」であるが、東国大学校本は「立」とする。馬場久幸氏に東国大学校本図書館所蔵原本を実見して頂いたが「亡」となっていた。写真の段階での修正が加えられたものと考えられる。
- ⑤ 本来「其」「可」であるが、縮刷蔵経は「是」とする。頻伽蔵経は縮刷蔵本を校正しているが、「可」を「得」と誤る。大正蔵経ではどちらも校正する。
- ⑥ 本来「愛」であるが、縮刷蔵経より「受」と誤り、頻伽蔵経・大正蔵経にも校正されずに踏襲される。
- ⑦ 本来「假」・「如」であるが、縮刷蔵経・頻伽蔵経ともに「瑕」・「知」に誤る。大正蔵経も「瑕」は誤ったまま踏襲したが、「知」は「如」と校正する。
- ⑧ 本来「耶」であるが、大正蔵経は「那」と誤る。
- ⑨ 本来「唾」であるが、大正蔵経は「唾」と誤る。
- ⑩ 本来「耶」であるが、大正蔵経は「那」と誤る。
- ⑪ 本来「歳」であるが、縮刷蔵経より「藏」と誤り、頻伽蔵経・大正蔵経も踏襲して誤る。
- ⑫ 本来「田」であるが、縮刷蔵経より「由」と誤り、頻伽蔵経・大正蔵経も踏襲して誤る。
- ⑬ 本来「倒」であるが、縮刷蔵経より「到」と誤り、頻伽蔵経・大正蔵経も踏襲して誤る。
- ⑭ 本来「兩」であるが、縮刷蔵経より「所」と誤り、頻伽蔵経も踏襲して誤る。大正蔵経は修正して「兩」とする。
- ⑮ 本来「輕」であるが、大正蔵経は空白とし、脱字する。

⑯ 本来「不」はないが、大正蔵経は「不」をいれる。因みにこの十八張と十九張とを大正蔵経は錯張している。これは縮刷蔵経から始まり頻伽蔵経・大正蔵経まで踏襲している誤りである。

⑰ 本来「令」であるが、縮刷蔵経より「爾」と誤り、頻伽蔵経・大正蔵経も踏襲して誤る。

⑱ 本来「先王」であるが、縮刷蔵経は「王先」と誤る。頻伽蔵経は校正し、大正蔵経も踏襲する。

⑲ 本来「其」であるが、縮刷蔵経は「共」と誤り、頻伽蔵経も踏襲して誤る。大正蔵経は校正する。

⑳ 本来「殿」であるが、縮刷蔵経は「股」と誤り、頻伽蔵経も踏襲して誤る。大正蔵経は校正する。

㉑ 本来「亦」であるが、縮刷蔵経は「今」と誤る。頻伽蔵経は校正し、大正蔵経も踏襲する。

以上をまとめてみると、六つに分類できる。

〔1〕縮刷蔵経を頻伽蔵経・大正蔵経がそのまま踏襲して誤ったもの…⑥⑦⑪⑫⑬⑯⑰

〔2〕縮刷蔵経を頻伽蔵経がそのまま踏襲し誤り、大正蔵経で正したもの…⑤⑭⑱⑳

〔3〕縮刷蔵経が誤まり、頻伽蔵経・大正蔵経で正したもの…⑱㉑

〔4〕大正蔵経だけが誤ったもの…②⑧⑨⑩⑮

〔5〕版木の欠損によるもの…①

〔6〕影印に加筆したもの…③④

この下巻では、頻伽蔵経だけが誤ったもの、頻伽蔵経と大正蔵経とが誤ったもの、縮刷蔵経と大正蔵経だけが誤ったものは無かった。二箇所訂正はしているものの頻伽蔵経は縮刷蔵経をよく踏襲しているといえる。また、影印本高麗蔵経と比較すると、縮刷蔵経の間違いをそのまま踏襲しているのが七か所で、1/3を占めている。

このことは、『那先比丘経』下巻の高麗蔵経第一八紙と一九紙とが入れ替わり錯張され、さらに高麗蔵経には本

来ない「不」の字を挿入していることを方廣鋳は指摘しているが、その淵源を大蔵経の編纂過程から辿ってみると、縮刷蔵経の編纂時に「不」字の挿入と錯張が行われ、それを頻伽蔵経も大正蔵経も正すことなく踏襲してきたことが判る。

同様のことは、『大乘中觀釋論』にもある。これも既に指摘したことであるが、本来は全十八巻である。しかしながら大正蔵経の第三十巻には九巻までしか入蔵されていない。底本となった増上寺にはこの第十巻から第十八巻までは存在しており、また延享年間に増上寺知蔵職の隨天が作成した『三大蔵目録』にも十八巻と記載されている。よって増上寺には縮刷蔵経の編纂時には存在していたのであるが、なぜか縮刷蔵経には後半の九巻が入蔵されなかった。この経緯を知るために、次には縮刷蔵経がどのように編纂されていたのかを明らかにしたい。

### 【3】縮刷蔵経の編纂について

縮刷蔵経の完成経過の概要は梶浦晉の「日本近代出版の大蔵経と大蔵経研究」<sup>⑤</sup>に既にまとめられている。ここではどのような編纂がなされたかに焦点をあてて記述したい。

明治一四年（一八八一）八月に天部一一冊の発刊がされ、明治一八年（一八八五）一二月霜部十冊をもって完結した。全四〇帙四一八冊の金属活字による刊行で五号活字、半頁二〇行一行四五字の袋綴であった。縦二三〇mm × 横一五二mm、校異を頭注に一行六字で配しているので、活字を小さくして持ち運びの利便性を第一に考えられている。これは前近代の流布版の大蔵経が黄檗版という木版印刷による方冊本で半面一〇行一行二〇字の袋綴であり、一冊が縦二七一mm横一九四mmの大きさで二〇九三冊という冊数と比較するといかに小型化していたかが

判り、縮刷という名前を冠した理由が理解できる。

さて、筆者は『弘教書院校場規則』に所収されている「大藏經校讐大綱」並びに「大藏經校讐別記」を紹介して述べたことがある。<sup>(6)</sup> 「大藏經校讐大綱」第一項に、

今の擧、麗本を以て本と爲し、之を宋元明三本と對して其の異を上に掲出する也。

(原文の漢文を書き下した。)

とあって、高麗藏經を底本とし、宋版・元版・明版の三本と対校したことが判る。また第三項には、

校讐に用ふる所の麗本及び宋元の三本は縁山の秘藏本を用ふ。

とあって、浄土宗大本山増上寺に秘藏されている高麗藏經・宋版(思溪版)・元版(杭州版)の三本並びに明版を使用したことが判る。また第四項の「一校讐業表」には、

第一業 改明本作麗本爲稿本

第二業 句讀

第三業 宋元明三本對校

第四業 再校

第五業 活版校合

と作業手順が示されており、明版を改めて高麗藏經としてつくり、稿本としたことが明記されている。増上寺秘藏の三大藏經は徳川家康公から賜った貴重な大藏經であるから、底本だからといってそのまま印刷のための原稿本として渡すことはできない。また高麗藏經には則天文字をはじめとして多くの異体字があり、それを金属活字の書体にどう反映させるかは大問題であった。異字については山崎精華の「異字の撰擇に就いて 附校合内規」に詳しい。

では、稿本となった明本には何が使われたのであろうか。山崎精華は前掲の論文で「縮冊（ママ縮刷）のはどうやら黄檗版らしい。」と述べている。<sup>(7)</sup>この記述は重要で、黄檗版をもつて高麗藏経と対校した例は江戸時代に既に三度も行われている。最初は宝永年間に浄土宗僧法然院忍激が、建仁寺に秘藏されていた高麗藏経と黄檗藏経を対校した。二度目は、浄土真宗浄勝寺丹山が文政年間から天保年間にかけて、建仁寺の高麗藏経と黄檗藏経とを対校した。三度目は、天保八年に建仁寺の高麗藏経が殆ど火災で焼失したことから、その複本を作っている。こうした事例を考慮すれば、印刷所に高麗藏経と対校した黄檗藏経が原稿本として渡されたことは肯首できる。

さて、「大藏經校讐別記」のなか第四項の「校讐業表」に

第一業 明本を改めて麗本と作し、稿本とす。稿本は元來麗本を用ふへし。然れとも世麗本の稿本に用ふへき無し。今新に寫して其用に備へんも亦容易に非す。已を得す明本を假用ふ。故に之を改めて明本をして全く麗本たらしむるなり。

（原文に句読点を付け、カタカナをひらがなに改めた）

とある。高麗藏経を原校本にすれば良いが、日本には書き込みして印刷所に渡すことのできるような高麗藏経はなく、かといって全蔵を写経して原稿本にするだけの時間も予算もない。もし写経できたとしても、写経が正確に高麗藏経を写しているか、また異体字をいかに統一あるものに処理するか、など諸問題がでてくる。そこでやむを得ず、明本（黄檗藏経）を原稿本にして、高麗藏経との相違点を書き込み、高麗藏経としたのである、という。黄檗藏経は流布版として販売されていて入手可能で、かつ基本的に明の萬曆版大藏経（以下、萬曆藏経と略称）を覆刻しているから、ある程度の異体字も統一され、筆画の止め・ハネも明確であったから金属活字印刷には最適であった。

大藏経という一大叢書の出版を企画するとき、いかに効率よく正確に・早く完結するかは大事である。大筋とし

ては間違いないものの、前項で述べたようにその綻びが痕跡として残っている。時代の環境や制約をもともせず  
に艱難辛苦を乗り越え、出版を完結した先学・先人の労苦の上に今日の研究基盤があることを踏まえつつ、その綻  
びの痕跡に学ぶことも必要ではないか、と思う。金字塔と崇めつつ、それを道標としてさらに前に歩みを進めるこ  
とが大事であろう。

さて、話を元に戻すが、縮刷蔵経の「暑二」に所収される『大乘中觀釋論』の後半第十卷から第十八卷までの欠  
卷は、原稿本の黄檗蔵経にない部分の経卷を補写する、ということの申し送りが不十分であったといえよう。また、  
縮刷蔵経の蔵八に所収される『那先比丘経』下巻の高麗蔵経第一八紙と一九紙とが入れ替わる錯張について、黄檗  
蔵本と高麗蔵経と比較すると、縮刷蔵経においても余りに本文の相違が顕著なので、二巻本と三巻本とに分けて入  
蔵されている。縮刷蔵経二巻本の巻頭頭注には、<sup>(8)</sup>「此經三本大異今以宋元對校明別附卷末」とあり、本来高麗蔵経  
をそのままに翻刻すべきところを、誤って錯張し、それがそのまま頻伽蔵経に引き継がれ、さらにはそれを大正蔵  
経まで踏襲してしまったのである。

大正蔵経でも、その底本と校本は、二巻本の底本として高麗蔵経が挙げられ、その校本として聖語蔵の隋経と巴  
利本とが記載されている。別本の三巻本の底本として明萬曆版が挙げられ、その校本としては宋本・元本・宮内省  
本とが記載されている。<sup>(9)</sup>

こうした誤りの原因は、先人・先学の作った大蔵経に対する信頼の高さを背景にしていると考えられる。

【4】新たな大蔵経編纂の機運

大蔵経という一大叢書の発刊には校正ミスという人為的な誤りが絶えず付きまとう。縮刷蔵経の編纂に尽力した島田蕃根は、刊行後に誤字・脱字・衍符等や頭註に補遺すべきものを発見し、十数年をかけて再調査し「縮刷蔵経正誤表」十一巻をまとめた<sup>(10)</sup>。

大正蔵経に所収される個々の經典についての誤字や脱字等は、研究者がそれぞれ個別に論文等で指摘していたが、叢書としての批判的発言としては藤枝晃であろうか<sup>(11)</sup>。

ワードプロセッサやPC機器が普及し始めてきた時代であったが、ネット環境はまだ整っていない時代である。新聞記者による記事とはいえ、朝日新聞夕刊の文化欄に「新たな大蔵経編纂さんの時代―米加大から帰国の藤枝晃さんに聞く―」とタイトルがあり、大見出しには「欠陥が目立つ基準の大正版」とある。内容は、大蔵経書誌学の講義でアメリカ・カリフォルニア大バークレイ校に招かれ、大学院生たちと各種版本の比較研究をした結果、世界の基準本とされているわが国の『大正新修大蔵経』（昭和九年完成）も、書誌学上からは意外な欠陥のあることがわかった、というものである。大正蔵経と、高麗蔵経と、房山石経と、金版大蔵経の四本を比較した結果、「大正大蔵経の時代は終わった、二十一世紀に向けてどういう大蔵経を編さんするか考える時代が来た、ということ締めくくりました。」とある。

また、末木文美士は「大蔵経と辞書の編纂―近代仏教学史の一側面<sup>(12)</sup>」において大正蔵経を取り上げ、「日本のみならず、世界の学者によって最も信用の置けるテキストとして用いられており、近代の日本の仏教学が世界に誇る

一大金字塔ということが出来る。」と称賛している。その一方で、次のように続けている。

このように、『大正蔵』は極めて質の高い優れた出版で、半世紀以上経った今日でも全く色褪せないが、どんなものでも完璧ということはありえない。例えば、句読の付け方に不適切な点が多いこと、高麗蔵に収められていない中国・日本の撰述書について、底本・校本の選び方に問題のあることなど、多少専門的に使った人であれば誰でも気付くことである。また、その国際性を考えれば、日本撰述のもの以外には、日本でしか通用しない返点を用いるのは不適当と思われる。しかし、最大の欠点は、逆説的な言い方ではあるが、余りに優れていて、再検討する気を研究者に起させなかつた点ではあるまいか。最近、韓国などから影印出版されている高麗版と対照してみると、誤植もあるし、単なる誤植とは思われない文字の相違も見られる。本来、古典の活字本を刊行したら、それが基づいている古版本や写本を写真版で刊行してより一層の研究を進めるのが常識である。だが、残念ながら誰もそれに手を着ける人はなく、わずかに海外で刊行された高麗蔵の影印本などで渴を癒しているのが現状である。写本・刊本の十分な調査に基づく一大影印叢書の刊行が望まれるが、残念ながら未だ機が熟していないようである。

と結んでいる。これは、まだフィルム写真撮影の時代で、影印出版する新たな大蔵経刊行を提言するものであった。また、船山徹は、「漢訳仏典その初期の成立状況をめぐって」<sup>(13)</sup>において、

実質的に言つて、大正蔵は、校勘結果などに関して『縮蔵』から受け継ぐことのできる情報はすべて受け継いだ上で、さらに『縮蔵』には含まれていない情報源として、宮内省図書寮所蔵の宋本やサンスクリット本等を新たに参照して校勘がなされた。このため、『縮蔵』においてすでになされている校勘については、『大正蔵』の編集者たちが自ら諸本の原本に当たりなおしているかどうか疑わしい場合も少なくない。現実には、

『縮蔵』の校勘を転載しているだけの場合、ありていにいえば、大正蔵の校勘記に示される読みが『縮蔵』からの孫引きである場合もある。

と指摘する。さらに誤植を欠陥の第一に挙げ、句読点の誤りを第二に挙げている。そして宋版・元版については増上寺本をもって誤植かどうか確かめることができないが、高麗蔵経については、細かな違いはあるものの影印高麗大蔵経で確かめることができるとの見解を記して、大正蔵経の恩恵を浴していることを踏まえて、「いかにしてそれをより使いやすいものに改善してゆくべきかこそに意を注ぐべきであろう。」と結んでいる。

最近では、日進月歩の科学技術によりデジタル画像写真による提言が方廣鋳によってなされた。前掲の「古典籍デジタル化という視野における『大正蔵』<sup>(14)</sup>」では、そのはじめに、

現代における古典籍デジタル化という視野から、あらためて『大正蔵』を評価するものである。『大正蔵』の歴史的な功績を十分に認めるといふ前提の下で、仏教文献研究者は、情報化という時代に起因するチャンスと挑戦に対応し、『大正蔵』の経験と教訓を吸収し、仏教典籍のデジタル化という新しい道を切り開かねばならないという考えを提示する。

と述べている。大正蔵経を時代の中で評価するとともに、今日のデジタル情報化のなかで原典テキストを、人間とコンピュータとの相互作用によりいかに効率良く比較対照し校勘していくか、その答えを「コンピュータ校勘評点システム」として提示している。また、大正蔵経の経験と教訓では、先に挙げた『那先比丘経』下巻の錯張や誤翻刻などにも言及している。人間による人海戦術的な翻刻校勘作業では、どこまでも誤字・脱字等が予想される。

「コンピュータ校勘評点システム」は、人間とコンピュータとが相互に短所を補完し、長所を伸ばすシステムと見えよう。

以上、共通するところは、大正蔵經の世界標準のテキストとしての役割について、その偉大な成果を認めつつも、大部であるが故の検証が不十分で見直されてこなかった点が指摘されている。筆者もそうした見直しをすべきと考えている。と同時になぜ、例えば大乘中觀釋論は九卷までしか入蔵されなかったのか。その原因を辿るとその抛りどころとした原稿本の頻伽蔵經に依存しすぎたからであり、頻伽蔵經はその原稿本とした縮刷蔵經に依存しすぎたからであると言えよう。縮刷蔵經は、その原稿本である黄檗蔵經との対校に集中した余り、黄檗蔵經にはない十巻から十八巻の九巻分を書写し原稿本として印刷所に届けることをしなかった、という経緯がわかる。とすれば、大正蔵經を編纂する時点、頻伽蔵經を編纂する時点、縮刷蔵經を編纂する時点の少なくとも三回の見直しの機会を逃してしまったということになる。それは、先学・先人たちの偉大な業績に対して敬意を払う余り、校勘の原理・原則を忘れてしまったと考えられる。そのような事は、大正蔵經より後に編纂された影印高麗大蔵經にもあてはまる。

#### 【5】影印高麗大蔵經の問題点

影印高麗大蔵經については、前述した船山徹も評価していたように、大正蔵經の不信点を確かめることの手段として大変有用である。これには二種類の刊行があつて、その概要については、馬場久幸『日韓交流と高麗版大蔵經』<sup>(15)</sup>に詳しい。そのなかで、

高麗蔵の影印本には、東国大学校本と東洋仏典研究会本の二種類がある。影印本の出版によって大正蔵に入蔵されることのなかった典籍類の閲覧が容易になり、また日韓両国での高麗蔵に関する研究が飛躍的に発展するなど、学界に及ぼした影響は計り知れないものがある。しかしながら、これら二種類の影印本については、出

版の動機や底本として使われた高麗蔵が何なのかに対する明確な答えを未だ得ていない。

といい、また、両影印本の底本が異なることも指摘している。東国大学校本の影印は一九五七年に第一冊が刊行され、一九六六年まで第二〇冊までが刊行されたが中断され、最終的に一九七六年に第四八冊目の最終冊で完結した<sup>(16)</sup>。そして、底本について第二〇冊までの底本は不明としながらも、「一九六九年以降に刊行されている東国大学校本（第二一冊以降）は、東国大学校所蔵の高麗蔵経を底本としたと考えるのが妥当である。」<sup>(17)</sup>と記している。もう一つの東洋仏典研究会本の底本は「ソウル大学校所蔵本を底本としている」<sup>(18)</sup>事が指摘されている。また、梶浦晋は「影印大蔵経を紹介した上で）影印本は、写真製版によって古写や古版を原本の様子をそのまま伝えようとするものであるが、不鮮明な箇所を修正を加えたり、別版で差し替えたりすることがあり、利用に際しては十分に注意する必要がある。」<sup>(19)</sup>と指摘して、影印大蔵経にも編集加工されている事を示唆している。

この編集加工について、筆者はかつて指摘したことがあった。影印高麗蔵経の大乗本生心地観經の第三卷と第四卷に一か所ずつの欠行があったからである。<sup>(20)</sup>この東国大学校本の欠行一か所と東洋仏典研究会本の欠行一か所以外にもまだ欠行箇所が存在するのではないかと、推定し欠行の事例を集めると先の二例を含め以下の二三か所の欠行を指摘することができる。<sup>(21)</sup>

①別訳雑阿含經第三卷二三張（図版①参照）

在魚師之手牽挽旋轉任魚師意世

東国存行

東洋欠行

②別訳雜阿含經第六卷六張（図版②参照）

生地娑羅林中爾時如來涅槃時到

東国欠行

東洋存行

- ③別訳雜阿含經第六卷一五張（函版③参照）  
 作所作不善乃共相決種種勝負實  
 東国存行 東洋欠行
- ④別訳雜阿含經第六卷一六張（函版④参照）  
 煩惱垢汗之心喜瞋失念無暫定有  
 東国存行 東洋欠行
- ⑤別訳雜阿含經第一六卷一〇張  
 恒沙及骨聚  
 東国存行 東洋欠行
- ⑥別訳雜阿含經第一六卷一一張  
 佛言可作方喻佛告比丘如有硬石  
 東国存行 東洋欠行
- ⑦仏説大安般守意經第一卷一二張  
 爲得生死相已得四禪但念空爲種  
 東国欠行 東洋存行
- ⑧大樓炭經第二卷一九張  
 閻羅王問閻羅王第五安諦審實問  
 東国欠行 東洋存行
- ⑨鴛掘摩經第一卷四張  
 取殺狼藉唯改所從又且獨步無侍  
 東国欠行 東洋存行
- ⑩阿毘達磨大毘婆沙論第二八卷一九張  
 相應隨其所應并餘有漏靜慮無色無  
 東国欠行 東洋存行
- ⑪阿毘達磨大毘婆沙論第五三卷一二張  
 初靜慮染一地諸色已斷離繫具見  
 東国欠行 東洋存行

⑫賢愚經第一一卷二二張

安快阿難白佛不審世尊過去世時

東国欠行

東洋存行

⑬衆經目錄第一卷一四張

渠安陽侯譯

東国欠行

東洋存行

⑭大唐内典錄第一〇卷二〇張

善財錄 諸新經序 笈多伝四卷

東国欠行

東洋存行

⑮大周刊定衆經目錄第一卷一四張

譯出長房錄

東国欠行

東洋存行

⑯開元釈教錄第三卷三四張

善法方便陀羅尼經一卷

東国欠行

東洋存行

⑰高僧伝第三卷七張

至辛頭那提河漢言師子曰緣河西入

東国欠行

東洋存行

⑱大乘理趣經第一〇卷四張

各別行住不能見色設令同住不見

東国欠行

東洋存行

⑲大乘理趣經第一〇卷一六張

自在神通能憶過去所種善根現

東国欠行

東洋存行

⑳大乘本生心地觀經第三卷一八張

或一菩薩多仏化 或多菩薩一仏化

東国欠行

東洋存行

②①大乘本生心地觀經第四卷二張

在者眞實語者無二語者是知道者

東国存行

東洋欠行

②②貞元新定釈教目錄第二三卷一張

標初首後列余經

東国欠行

東洋存行

②③仏説発菩提心破諸魔經下卷四張

婆羅門汝今已能得正智慧能説如

東国欠行

東洋存行

以上、東国大学校本の欠行は一七か所、東洋仏典研究会本は六か所であった。その子細を見ると、東国大学校本の右端一行の欠行は一一か所、左端一行の欠行は六か所で、二〇巻までの初期の刊行時期では三か所、再刊行後は一四か所であった。いずれも左右の違いは別にして、両端という位置からすると、レンズワークがずれて一行分カットされたのか、あるいはフィルムには欠行はなかったが、製本の段階でカットされたものと考えられる。一方の東洋仏典研究会本の欠行箇所は約1/3の六か所（①③④⑤⑥②①）であった。右端一行の欠行が四箇所であり、左端の欠行はなかったが、端ではなく右二行目に一箇所（⑥）、左から二行（二三行目）に一箇所（②①）であった。このことは、底本であるソウル大学校所蔵本高麗藏經の欠行は考えられないから、撮影後の画像処理を誤ったとしか考えられない不可解な事例である。

また、画像の処理という点では、先に挙げた大乘本生心地觀經の補筆の問題である。前記した【2】その検証」の項の③④の事例は、影印東国大学校本では明らかな補筆をしている。第三七巻であるから、一九七六年刊行で東国大学校所蔵本の高麗藏經を底本として刊行されたと考えられる。前述したように東国大学校本の高麗藏經を

馬場久幸氏に確認して頂いたところそれぞれの該当箇所は「知・亡」となっているということである。とすれば、撮影後に手を加え補筆したか、あるいは第三七巻は補筆されている他所の高麗藏経によつて刊行されたとも考えられる。いずれにしても、影印本にこのような問題点が内包されていることは、信頼度が高いだけに今後とも検証していく必要がある。

この東国大学校本の影印高麗大藏経の信頼度は、他国の大藏経編纂にも影響を及ぼしている。台湾の新文豊出版公司から一九七一年にも影印高麗大藏経全四八冊の刊行があり、北京の中国綫装書局からも二〇〇四年に影印高麗大藏経全八〇冊が刊行されている。さらに注目したいのは、中華大藏経にも書影が使われていることである。ともに東国大学校本と同様の欠行がみられる。

中華大藏経は、基本的底本として山西省趙城県の広勝寺から発見された金藏をもとに出版されている。その欠巻を補う点から高麗藏経を採用したことをその校勘記に明記している。先に欠行を指摘した二三箇所を検証してみると、六か所（①④⑥⑲⑲⑲）が高麗藏経で補巻されていることが判った。いまそれらを検証してみると、<sup>(22)</sup>

①別訳雑阿含経第三卷二三張。

在魚師之手牽挽旋轉任魚師意世

中華三三卷存行 東国一九卷存行 東洋二一卷欠行

④別訳雑阿含経第六卷一六張

煩惱垢汗之心喜瞋失念無暫定有

中華三三卷存行 東国一九卷存行 東洋二一卷欠行

⑥別訳雑阿含経第一六卷一一張

佛言可作方喻佛告比丘如有硬石

中華三三卷存行 東国一九卷存行 東洋二一卷欠行

⑳大乘本生心地観経第三卷一八張

或一菩薩多佛化 或多菩薩一佛化 中華六七卷欠行 東国三七卷欠行 東洋四〇卷存行

㉑大乘本生心地観経第四卷二張

在者眞實語者無二語者是知道者 中華六七卷在行 東国三七卷存行 東洋四〇卷欠行

㉒貞元新定釋教目錄第二三卷一張中華脱行

標初首後列餘經 中華五五卷欠行 東国三八卷欠行 東洋四一卷存行

となつて、東国大学校本の欠行二箇所（㉑㉒）が何れも欠行している。このような事例は高麗蔵経への信頼が高ければ高いほどその影響は大きいと思われる。

おわりに

以上の検討から、確かな影印の完成と、それに対応するテキストファイルの相互活用が今後さらに求められていくことになる。その方向性の一つの大きな柱が方廣鋸の推し進める「コンピュータ校勘評点システム」であろう。その際に大切なことは、テキストの選定とその方法であろう。建築にはどんなに優れた設計図面が描けていても、それを実際に形にしていく施工者の理解と実行力が不可欠であり、またその素材としての原材料に不純物が含まれていては、耐用年数を保つことはできない。

馬場久幸が摺印時期の異なる高麗蔵経六本を比較すると、『経律異相』第五十卷（二十八張十二行目）では、大正蔵経とその底本である増上寺本の高麗蔵経をはじめ、妙心寺本（建仁寺本）・相国寺本・法然寺本・泉涌寺本な

どの諸本がいずれも「此形獄又」としているのに対し、高麗期に摺印された大谷大学本では「此形獄十又」となっている。宋本・元本・明本などの他本を参照して理校すれば、元には「卒」という字があつて、その上部分が欠落して「十」と判読できる部分だけが残されたと指摘している<sup>(23)</sup>。

同一の版本による刊本だからといって、全く摺印が同じとはならない。この高麗藏経と同様に、中国の明萬曆版大藏経においても<sup>(24)</sup>、日本の黄檗版大藏経においても<sup>(25)</sup>、同様に摺印時期による相違点を見出すことができる。このことは、写本と同様に版本も刮目して調査すべきことを意味している。

今後の大藏経編纂のあり方は、所在が明かでかつ閲覧可能な底本のテキストデータを作成し、データと画像とをリンクさせた相互検索システムを可能にした上で、諸本をいかに校勘し公開していくかにかかっていると見てよいであろう。

註

- (1) 『大藏経目録』所収、昭和七年八月刊。
- (2) 方廣鋳「古典籍デジタル化という視野における『大正藏』」(平成二六年度秋期特別展関連シンポジウム『縮刷藏経から大正藏経へ』佛教大学宗教文化ミュージアム二〇一四年十一月)
- (3) 出典は末尾、表Iを参照。
- (4) 『東アジアにおける宗教文化の総合的研究―仏教美術・仏教学・考古学・歴史学分野―』一三九頁平成二〇年三月刊。
- (5) 梶浦晉「日本近代出版の大藏経と大藏経研究」(平成二六年度秋期特別展関連シンポジウム『縮刷藏経から大正藏

経へ』 佛敎大学宗敎文化ミュージアム二〇一四年一月。

(6) 「日本近代における『黄檗版大蔵経』の活用」(『東アジアにおける宗敎文化の総合的研究』一四二頁、佛敎大学アジア宗敎文化情報研究所発行二〇〇八年三月刊)。

(7) 『現代仏敎』五卷五五号一九二八年。

(8) 藏八、四十三張裏。

(9) 『昭和法宝総目録』第一卷四四八頁中。

(10) 梶浦晋「日本近代出版の大蔵経と大蔵経研究」三四頁(平成二六年度秋期特別展関連シンポジウム『縮刷蔵経から大正蔵経へ』佛敎大学宗敎文化ミュージアム刊)及び『近代の大蔵経と浄土宗―縮刷蔵経から大正蔵経へ―』(佛敎大学宗敎文化ミュージアム秋期特別展展観目録写真二二頁・解説七〇頁二〇一四年一〇月刊)。

(11) 藤枝晃「新たな大蔵経編さんの時代」朝日新聞夕刊一九九〇年七月七日記事。

(12) 末木文美士「大蔵経と辞書の編纂」(『日本仏敎思想史論考』大蔵出版一九九三年四月)。

(13) 『漢籍はおもしろい』七六頁研文出版二〇〇八年三月刊。

(14) 平成二六年(二〇一四)度秋期特別展関連シンポジウム『縮刷蔵経から大正蔵経へ』佛敎大学宗敎文化ミュージアム刊。

(15) 二〇一六年二月法蔵館刊。

(16) 同書三〇四頁。

(17) 同書三〇五頁。

(18) 同書三二二頁。

- (19) 「近代における大蔵経の編纂」 佛教大学図書館報『常照』五一号二〇〇二年三月刊。
- (20) 「高麗版と黄檗版との大蔵経対校―忍淑和尚の対校事業の発端の検討―」(『高麗大蔵経の研究』) 四九〇頁、二〇〇六年三月、東国大学校刊。

(21) 出典は巻末、表Ⅱを参照。増上寺高麗版大蔵経は存行である。また図版について『大乘本生心地観経』の二か所は、既報告しているので除いている。

(22) 中華大蔵経の出典は末尾、表Ⅲを参照。

(23) 『高麗版大蔵経の諸相』(二〇一二年佛教大学開学一〇〇周年企画秋期特別展図録七四頁佛教大学宗教文化ミュージアム二〇一二年一〇月刊)。

(24) 『明・萬曆版大蔵経の諸相』佛教大学アジア宗教文化情報研究所発行二〇一六年三月。

(25) 『黄檗版大蔵経展―その流布と改刻―』佛教大学アジア宗教文化情報研究所発行二〇一一年一〇月。

〈表Ⅰ〉

	東国大学所在	東洋仏典研究会本所在	縮刷蔵経所在	頻伽蔵経所在	大正蔵経所在
①	三〇卷二五一頁上一七行	三三卷九五頁下一七行	蔵八四八丁A七行	蔵八四八丁A七行	三三卷六九九頁上一四行
②	三〇卷二五一頁中五行	三三卷九六頁上五行	蔵八四八丁一〇行	蔵八四八丁一〇行	三三卷六九九頁上二二行
③	三〇卷二五二頁中二行	三三卷九七頁上二行	蔵八四八丁B一一行	蔵八四八丁B一一行	三三卷六九九頁下二〇行
④	三〇卷二五二頁下一九行	三三卷九七頁中一九行	蔵八四九丁A四行	蔵八四九丁A四行	三三卷七〇〇頁上一四行
⑤	三〇卷二五三頁上一六行	三三卷九七頁下一六行	蔵八四九丁A一一行	蔵八四九丁A一一行	三三卷七〇〇頁中一二行
⑥	三〇卷二五三頁上二〇行	三三卷九七頁下二〇行	蔵八四九丁A一三行	蔵八四九丁A一三行	三三卷七〇〇頁中一五行

⑦	三〇卷二五三頁下一一行	三三卷九八頁中一一行	藏八四九丁B五行	藏八四九丁B五行	三三卷七〇〇頁下一七行
⑧	三〇卷二五四頁中七行	三三卷九九頁上七行	藏八四九丁B一九行	藏八四九丁B一九行	三三卷七〇一頁上二二行
⑨	三〇卷二五四頁下一二行	三三卷九九頁中一二行	藏八五〇丁A七行	藏八五〇丁A七行	三三卷七〇一頁中一六行
⑩	三〇卷二五五頁上二〇行	三三卷九九頁下二〇行	藏八五〇丁A一七行	藏八五〇丁A一七行	三三卷七〇一頁下一三行
⑪	三〇卷二五五頁中九行	三三卷一〇〇頁上九行	藏八五〇丁B一行	藏八五〇丁B一行	三三卷七〇一頁下二三行
⑫	三〇卷二五五頁下八行	三三卷一〇〇頁中八行	藏八五〇丁B八行	藏八五〇丁B八行	三三卷七〇二頁上一二行
⑬	三〇卷二五六頁上一一行	三三卷一〇〇頁下一一行	藏八五〇丁B一六行	藏八五〇丁B一六行	三三卷七〇二頁中五行
⑭	三〇卷二五六頁中一六行	三三卷一〇一頁上一六行	藏八五二丁A六行	藏八五二丁A六行	三三卷七〇二頁中二八行
⑮	三〇卷二五六頁中一九行	三三卷一〇一頁上一九行	藏八五二丁A七行	藏八五二丁A七行	三三卷七〇二頁下二行
⑯	三〇卷二五七頁上一行	三三卷一〇一頁下一行	藏八五二丁A八行	藏八五二丁A八行	三三卷七〇二頁下六行
⑰	三〇卷二五七頁上一二行	三三卷一〇一頁下一二行	藏八五二丁A一行	藏八五二丁A一行	三三卷七〇二頁下一五行
⑱	三〇卷二五七頁下五行	三三卷一〇二頁中五行	藏八五二丁B一三行	藏八五二丁B一三行	三三卷七〇三頁中一〇行
⑲	三〇卷二五七頁下一四行	三三卷一〇二頁中一四行	藏八五二丁B一五行	藏八五二丁B一五行	三三卷七〇三頁中一七行
⑳	三〇卷二五八頁上一行	三三卷一〇二頁下一行	藏八五二丁B一八行	藏八五二丁B一八行	三三卷七〇三頁中二五行
㉑	三〇卷二五八頁上六行	三三卷一〇二頁下六行	藏八五二丁B二〇行	藏八五二丁B二〇行	三三卷七〇三頁中二九行

〈表Ⅱ〉

- ①別訳雑阿含経第三卷二三張、東国一九卷二六頁中、東洋二二卷四九九頁下。  
 ②別訳雑阿含経第六卷六張、東国一九卷五一頁下、東洋二二卷五二五頁上。  
 ③別訳雑阿含経第六卷一五張、東国一九卷五四頁下、東洋二二卷五二八頁上。

- ④ 別訳雑阿含経第六卷一六張、東国一九卷五五頁上、東洋二二卷五二八頁中。
- ⑤ 別訳雑阿含経第一六卷一〇張、東国一九卷二五一頁上、東洋二二卷六二四頁中。
- ⑥ 別訳雑阿含経第一六卷一一張、東国一九卷二五一頁中、東洋二二卷六二四頁下。
- ⑦ 仏説大安般守意経第一卷一二張、東国二〇卷四八二頁上、東洋二三卷二八二頁下。
- ⑧ 大樓炭経第二卷一九張、東国一九卷四三八頁下、東洋二二卷九一二頁下。
- ⑨ 鴛掘摩経第一卷四張、東国二二卷五九九頁上、東洋一九卷一〇八四頁下。
- ⑩ 阿毘達磨大毘婆沙論第二八卷一九張、東国二六卷二二三頁中、東洋二八卷八四二頁中。
- ⑪ 阿毘達磨大毘婆沙論第五三卷一二張、東国二六卷四〇四頁上、東洋二八卷一〇三三頁上。
- ⑫ 賢愚経第一一卷二二張、東国二九卷一一〇〇頁下、東洋三二卷八五二頁中。
- ⑬ 衆経目録第一卷一四張、東国三一卷六一六頁中、東洋三四卷六一八頁中。
- ⑭ 大唐内典録第一〇卷二〇張、東国三一卷七八一頁中、東洋三四卷七八三頁中。
- ⑮ 大周刊定衆経目録第一卷一四張、東国三一卷七九八頁中、東洋三四卷八〇〇頁中。
- ⑯ 開元釋教録第三卷三四張、東国三一卷一〇一二頁中、東洋三四卷一〇一五頁下。
- ⑰ 高僧伝第三卷七張、東国三二卷七八七頁下、東洋三五卷九一二頁中。
- ⑱ 大乘理趣経第一〇卷四張、東国三七卷三九五頁中、東洋四〇卷五八八頁中。
- ⑲ 大乘理趣経第一〇卷一六張、東国三七卷三九九頁中、東洋四〇卷五九二頁中。
- ⑳ 大乘本生心地観経第三卷一八張、東国三七卷五〇〇頁上、東洋四〇卷六九四頁下。
- ㉑ 大乘本生心地観経第四卷二張、東国三七卷五〇一頁下、東洋四〇卷六九六頁中。

〈表Ⅲ〉

- ②② 貞元新定釋教目錄第二三卷一張、東国三八卷三四六頁中、東洋四一卷四七三頁中。
- ②③ 仏説發菩提心破諸魔經下卷四張、東国四〇卷三三八頁下、東洋四三卷五三九頁下。
- ① 中華大藏經三三卷二九一頁中。
- ④ 中華大藏經三三卷四五六頁上。
- ⑥ 中華大藏經三三卷四五六頁中。
- ⑩ 中華大藏經六七卷二四頁下。
- ⑪ 中華大藏經六七卷二八頁中。
- ⑫ 中華大藏經五五卷八二一頁上。

【付記】

本稿は、二〇一八年五月二六日に「東アジア文化の政体性・共有性・拡張性」のテーマのもと韓国東亜大学校で開催された国際学会の発表原稿「大正新脩大藏經の編纂について―その底本（高麗藏）と校本（萬曆藏）を中心として―」が基となっています。発表の機会と、この紀要掲載に許可を下さった東亜大学校教授崔永好先生に感謝申し上げます。当日配布の冊子（韓国語文・日本語文）の誤記を直し、参考文献として掲げたところを注記として記載し少しく題目に合わせて改訂しましたが骨子および出典等の変更はありません。また、発表当日はパワーポイントで影印高麗大藏經の東国大学校本と東洋仏典研究会本とを対照させて説明しましたが、この度は増上寺と東国大学校の許可を得て写真を掲載することができました。ここに、改めて関係各位に甚深の謝意を申し上げます。

また、昨年末に『新編大藏經 成立と変遷』（法蔵館）が刊行されました。合せて参照下さい。

凶版① 『別譯雜阿含經』 第三卷二十三張

1 東洋仏典研究会本

第二一卷四九九頁下 第一行欠行

2 東国大学校本

第一九卷二六頁中 第一行存行

3 増上寺所蔵本 延享年間補写本

在魚師之手牽挽旋轉任魚師意世  
 間之中多有衆人得勝封祿憍慢自  
 恣貪嗜五欲加惱衆生亦復如是所  
 以者何如斯愚人即入魔網為網所  
 獲周迴舉動住魔所為尔時世尊即  
 說偈言  
 縱逸著事業 荒迷嗜五欲 不知有惡果  
 如魚入密網 此業已成就 極受大苦惱  
 佛說是已諸比丘聞佛所說歡喜奉行  
 如是我聞一時佛在舍衛國祇樹給  
 孤獨園尔時波斯匿王於閑靜處作  
 是思惟世界之中少有於人得勝封  
 祿而不憍恣不嗜五欲不恣衆生世  
 界之中多有衆人得勝基業憍慢自  
 恣貪嗜五欲加惱衆生思惟是已從  
 坐處起即詣佛所頂礼佛足在一面  
 坐白佛言世尊我今靜處作是思惟  
 世界之中少有衆人得勝基業不憍恣  
 不貪五欲不恣衆生多有衆人得勝基  
 業貪嗜五欲加惱衆生佛言大王如是  
 如是實如汝語譬如獵師鑿穿捕鹿罟  
 入罟中隨意而取世界之中多有衆  
 人得勝基業憍慢自恣貪嗜五欲苦楚  
 衆生亦復如是如斯愚人入於魔網

別譯雜阿含經第三卷第三張不

在魚師之手牽挽旋轉任魚師意世  
 間之中多有衆人得勝封祿憍慢自  
 恣貪嗜五欲加惱衆生亦復如是所  
 以者何如斯愚人即入魔網為網所  
 獲周迴舉動住魔所為尔時世尊即  
 說偈言  
 縱逸著事業 荒迷嗜五欲 不知有惡果  
 如魚入密網 此業已成就 極受大苦惱  
 佛說是已諸比丘聞佛所說歡喜奉行  
 如是我聞一時佛在舍衛國祇樹給  
 孤獨園尔時波斯匿王於閑靜處作  
 是思惟世界之中少有於人得勝封

図版② 『別譯雜阿含經』 第六卷六張

1 東洋仏典研究会本

第二一卷五二五頁上 第一行存行

2 東国大学校本

第一九卷五一頁下 第一行欠行

3 増上寺所蔵本 存行

告阿難曰汝可為我於雙樹間北首  
敷座於時阿難受佛勅已於雙樹間  
北首敷座既敷座已還至佛所頂礼  
佛足在一面坐白佛言世尊我於雙  
樹間北首敷座所作已竟今時世尊  
即從坐起往趣雙樹敷上北首右脇  
而卧足足相累繫心在明起於念覺  
先作涅槃想今時拘尸那竭國有一  
梵志名須跋陀羅先住彼國其年朽  
邁一百二十時彼國中諸力士輩供  
養恭敬尊重讚歎是阿羅漢時須跋  
陀羅傳聞人說婆伽婆於今日夜當  
入涅槃作是念言我於法中有所疑  
惑唯有羅曇必能解釋決我所疑作  
是念已即出拘尸那竭往詣婆羅林  
尊者阿難在外經行時須跋陀見阿  
難已即詣其所白阿難言我聞他說  
沙門瞿曇於今日中夜當入無餘涅  
槃吾今須見語決所疑阿難答言梵  
志佛身疲倦汝今擾惱須跋陀羅白  
阿難言我聞如來今日中夜入無餘  
涅槃我昔曾聞宿昔仙言若如來至  
眞等正覺出現於世如優曇鉢花難

別譯雜阿含經第六卷六張

生地婆羅林中今時如來涅槃時到  
告阿難曰汝可為我於雙樹間北首  
敷座於時阿難受佛勅已於雙樹間  
北首敷座既敷座已還至佛所頂礼  
佛足在一面坐白佛言世尊我於雙  
樹間北首敷座所作已竟今時世尊  
即從坐起往趣雙樹敷上北首右脇  
而卧足足相累繫心在明起於念覺  
先作涅槃想今時拘尸那竭國有一  
梵志名須跋陀羅先住彼國其年朽  
邁一百二十時彼國中諸力士輩供  
養恭敬尊重讚歎是阿羅漢時須跋

図版③ 『別譯雜阿含經』 第六卷一五張

1 東洋仏典研究会本

第二一卷五二八頁上 第一行欠行

2 東国大学校本

第一九卷五四頁下 第一行存行

3 増上寺所蔵本 存行

作所作不善乃共相決種種勝負實  
 有是過唯願世尊憐愍我故聽許懺  
 悔佛言知汝誠心懇重懺悔汝實櫻  
 愚無所知解所作不善不如佛教非  
 出家法乃諍勝負各云多知乃至我  
 前言說句義具足汝不具足如是勝  
 負實不應作吾今受汝誠心懺悔使  
 汝善法增長無有退失何以故若能  
 至心實知有罪然後懺悔後莫復作  
 如是懺者善法增長無有退失諸比  
 丘聞佛所說歡喜頂禮而去  
 如是我聞一時佛在舍衛國祇樹給  
 孤獨園今時尊者摩訶迦葉住舊園  
 林毗舍講堂中時尊者迦葉於日  
 沒時從禪定起往至佛所禮佛足已  
 在一面坐佛告迦葉汝可教授諸比  
 丘等當為說法所以者何我恒教授  
 汝亦應念我常為諸比丘說法汝亦  
 應念迦葉白佛是諸比丘難可教授  
 不能受語佛告迦葉汝於今者見何  
 因緣而不為說迦葉對曰若不信者  
 退失善法使生懈怠無有慚愧愚癡  
 無智貪著他物有志害心瞋蓋所覆  
 掉動不停於法疑惑深著我見具於

別譯雜阿含經卷第六 第五張下

作所作不善乃共相決種種勝負實  
 有是過唯願世尊憐愍我故聽許懺  
 悔佛言知汝誠心懇重懺悔汝實櫻  
 愚無所知解所作不善不如佛教非  
 出家法乃諍勝負各云多知乃至我  
 前言說句義具足汝不具足如是勝  
 負實不應作吾今受汝誠心懺悔使  
 汝善法增長無有退失何以故若能  
 至心實知有罪然後懺悔後莫復作  
 如是懺者善法增長無有退失諸比  
 丘聞佛所說歡喜頂禮而去  
 如是我聞一時佛在舍衛國祇樹給  
 孤獨園今時尊者摩訶迦葉住舊園

図版④ 『別譯雜阿含經』 第六卷一六張

1 東洋仏典研究会本

第二一卷五二八頁中 第一行欠行

2 東国大学校本

第一九卷五五頁上 第一行存行

3 増上寺所蔵本

頽憊垢汙之心喜瞋失念無暫定有如是等種種不善惡法決定具有如斯等人尚無少善况復增進善法無有退失若復有人具於信心不退善法精進不倦能修慚愧有智之人具行善法無有貪想遠離瞋除睡眠盖心不掉動無有疑惑不著身見心淨無滌不喜瞋恚能住心念具於禪定善法不退若有具上種種善法我尚不說彼人善法停住况不增長如斯等人於日夜中善法增長佛告迦葉如是如是如汝所說若不信者退失善法乃至如斯等人尚無少善况復增長若復有人具信心者不退善法乃至我尚不說彼人善法停住况不增長時諸比丘聞佛所說歡喜奉行如是我聞一時佛在舍衛國祇樹給孤獨園舍講堂時尊者迦葉於日沒時從禪定起往詣佛所頂礼佛足在一面坐佛告迦葉汝可教授諸比丘等為其說法所以者何我常教授汝亦應念我常為彼而說法要汝亦應念迦葉白佛言世尊是諸比丘不能

別譯阿含經卷第六 増上卷不

頽憊垢汙之心喜瞋失念無暫定有如是等種種不善惡法決定具有如斯等人尚無少善况復增進善法無有退失若復有人具於信心不退善法精進不倦能修慚愧有智之人具行善法無有貪想遠離瞋除睡眠盖心不掉動無有疑惑不著身見心淨無滌不喜瞋恚能住心念具於禪定善法不退若有具上種種善法我尚不說彼人善法停住况不增長如斯等人於日夜中善法增長佛告迦葉如是如是如汝所說若不信者退失善法乃至如斯等人尚無少善况